

## 詩 追憶のカイロ (7)

### とよださなえ

編集部都合で、しばらく掲載できなかった「とよださなえさんの詩」が戻ってきました。カイロで過ごした経験のある読者のなかには、とよださんの詩が、ほのぼのとして暖かく、懐かしいカイロの情景を思い出させてくれると、喜んでくださり、次回を待っている方々もいて、とてもうれしく思います。

この詩集は、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした3年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』(2019年8月出版)から、作者の承諾を得て紹介するものです。

とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のことになりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争(1973年)後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。当時も今も、近隣で紛争や内乱が止むときはなく、ジャーナリストとして多忙を極める夫君の仕事を支援しながら、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて、5歳と3歳の幼い子供たちを育てていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した不安な世界をつなぐ何か暖かいものを感じることができるかもしれません。

今月の掲載詩は、「動物園って何だっけ」です。

皆様はカイロ動物園にいらしたことがおありですか？私の子供たちは行きましたが、私は行ったことがありません。この詩を読むと、行かなかった方がよかったのかどうか・・・でも子供たちは楽しそうでした。(塩尻和子)

### 動物園って何だっけ

カイロ動物園の入園料  
五円ばかりを支払うと  
通訳をしてあげるといふ  
軍服を着た男たちに囲まれた

動物園の通訳志願者の出現に  
動物園って何だっけと  
思いがけない問いかけをひっさげて  
幼児二人の手をひいて

兎も角 歩き出した  
飛び交う蠅と一緒に  
通訳志願者たちに  
手を振り  
付いて来るなの合図を送り続けながら

まずは ユーカリの林  
皆大木だから王様時代のものだろう  
裏目裏目というのか  
せっかくの砂漠の中の丹精の日陰なのに  
舞台装置でいうと  
悪魔の森の入口とでも名付けたい  
白灰色のカラス大の鳥が  
枝とういう枝に無気味に密着していた

物資不足のエジプトだから  
カラスにするにも  
黒ペンキが足りなかった  
というようだ  
動物園に来られて良かったネ  
母親らしい声をかけたが  
亜理も亮介も黙ったままだった

シマウマが群れて  
柵の中を駆け回っていた  
まるで上野の動物園みたいネ  
こっちの方が広いわネ！  
見知った動物を見て喜んだ  
東京だったら  
珍しいものを見たがるのだろうが……

亜理と亮介の小さな手に  
青草を握らせた  
チップをねだる大きな手  
振って湧いたような人と  
もう 青草の先を噛んでいるシマウマ  
ガラベアヤのシマウマ係がささやかに  
青草をタネに商売をしている時  
通訳志願者たちは気配を消し  
ただの見物人になっていた

金網の中でコンドルが  
ふてくされて木に止まっていた  
カイロの暑さが肌に合わないのだろう  
かつてリマで見たように

強そうでも勇ましくもなかった  
いつ迄たっても付いてきた  
ついに一人になった通訳志願者が  
ペルーという島のコンドルという鳥だ  
と説明のつもりで話した  
アノネ ペルーハ島ジャナクテ 南米大陸！

珍種の羊の群れの様に  
日本人親子四人が歩く傍を  
エジプト人が取り囲み  
誘導していったのか  
大きな鍵束を横腹にぶらさげた男のいる  
しっかりした 建物の入口についた  
何か動物がいたのに もうオウチにはいったのネ

なれない外国人が来た時のコースなのか  
オウチの中に家族四人が押し込まれ  
鍵の男はドアをロックした  
ナセル・ジュニア！ スマイル！  
仕込まれたものか 習性なのかは  
知らないが

ライオンがウオーと大口をあけた

檻といっても鉄柵の間から足が出て  
私の顔に届きそうだ  
ライオンの扁桃腺なんか見たくないと  
つぶやいても  
なにしろ ナセル・ジュニア  
ラッフ

鍵の束をかさにきたライオン係は  
反り身で 掛け声をかけた  
ゴオー 笑うのもほほえむのも一頭で  
二十頭のライオンは 呼応して叫ばなかった  
チップの小銭が品切れになってきて  
ポケットをまさぐる夫に  
ナセル・ジュニアのヒゲというのを  
ぶらさげてみせた  
ポンド札を出せというサインに見えた

傍で見る顔としては  
ライオンよりも馴染みになった  
通訳氏にエジプト軍兵士の月給を尋ねた

別れるにあたって  
ペルーという島の話だけでは  
余りに心もとなすぎだから  
「月給三ポンド」「タバコ錢稼ぎにここで通訳している」  
マサカ！？  
カイロ動物園見物中にチップとして使った  
金額より安い  
それにしても  
通訳って何だっけ  
月給って何だっけ  
チップって何だっけ  
疑問が追いかけてきた

翌日

親愛なるムスタッファに

初の動物園行きを話した

「兵隊さんのサラリーは月三ポンドというのは本当」

「あー三ポンドか。私の時代は二ポンドだった」